
Realize Network

葉月秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e a l i z e N e t w o r k

【Nコード】

N 5 6 7 4 D

【作者名】

葉月秋人

【あらすじ】

一つの風景に、少女と少年が佇んでいた。少女は問う。「この世界は気に入った？」薄暗い部屋に、明るく灯ったモニター。向かい合って、一人の男が座っている。彼には疑問があった。この世界は本当なのか？風の吹き抜けるビルの屋上。眼下には、林立するビル群と車の流れ。彼に、恐怖はなかった。

序章 1 その先の風景

そこは風に葉が舞っていて、陽光に照らし出された景色が、鮮烈な印象を持っている。

そこに一人の少女。間を置いて少年が立っている。肌に程よい風を感じる。

「この世界は気に入った？」

少女がそう言くと、少し下を向き少年が応える。

「何て言うか、色々ありすぎて、取り留めのない世界だね」

「そう。なら、この場所は気に入った？」

軽く目を閉じ、少女が言う。

「そう。。悪くない。」

「・・・じゃあ」

室内は薄暗く、家具や机やベッドがぼんやりと浮かび上がっている。

一箇所だけ明るいディスプレイ。そこに座る男が一人。

黙ってカチ、カチ、とマウスをクリックする音だけが響いている。

この世界は本当なのか、今の自分は本当の自分なのか。彼には疑問があった。

その静止画の意味を感じ取りながら、何処かぼんやりとした意識で

イスに腰掛けている。

そうしながらも、世界に対する疑問が頭に引っかかっている。
日々歩く日常も、街並みも、その風景も、どこか本物でないような
気がして。

歩んできた人生の体験も、確かに存在して、世界を感じてきたはず。
なのにどうしてか、信じることができない。

この世界はもしかしたら、本物ではないのではないか？

何故かで信じることができずに、淡々と日常を過ごしてきた。

家族と過ごしていても、友達と居ても、街中を歩いていたとしても、
何処か体験が、一歩引いたところから見た世界のように。

風を感じる。少し強めの風。視界には、眼下に広がる道路や、林立
する建物。

遠く、上方から眺めた風景。

恐怖はなかった。

落下しても、その先に別の世界が待っているような気がしたから。

そう、それを僕は、知っていたのだろうか？

肌に風を感じ、自然と目を閉じる。フツと力が抜け、その場に倒れ
こむように体が傾むいていく。

そう、とても自然に。。

気づくとビル郡を見上げていた。

だがそれは、記憶にある落ちる前の景色とは違い、それは廃墟だった。

足元から光が舞い、ボンヤリとした青い光が、ゆっくり回りながら上っていく。

空が薄暗く曇り、少年はそれ見上げている。

その先に、何があるのか、知っているかのように。

序章 2 何時もの景色

「さとし、さとし」

母親の呼ぶ声がする。

部屋が暗いというのは分かっていた。

雨戸は閉めてないから、室内が暗いなら夜だ。

11時には寝たから、今は深夜の筈。

名前を呼ばれて起きたが、そこに、母親の姿はなかった。

・・幻聴。それとも夢の中の声だったのか。

「さとし！」

大きく呼ばれて、ハッと気づいた。

母親が腰に手を当て、仁王立ちしている。

ああ。

どうやら夢想の世界に浸っていたらしい。

余りに入り込み過ぎていて、その世界をリアルに感じていた。

・じゃあ、その世界は現実なの？

一瞬脳裏を言葉がよぎる。

・・今のは？

「さとし、起きてるの？」

「・・・え？」

「もうすぐ夕食だから、準備手伝って」

「あ、ああ・・・分かった」

母親が去る。

「じゃあ、その世界は現実なの？」

ふと過ぎった、その言葉を思い出す。

窓から茜色の光が差し込んでいる。

時刻は夕刻。

胡坐をかいたまま、窓の向こう風景を眺めていた。

「・・・ん　なんだっけ。夕飯の支度の手伝いだっけ。」

その独特の世界感に何処か惹かれつつも、ベッドから腰を浮かせた。

何かが違う。

いつもの景色。

母親が夕飯の支度をし、室内はオレンジ。
何時も見えてきた、という認識があるのに、何処かで違う、と感じて
いる。

あれ。俺、いつも、ここに、居たっけ・・・？
そんな考えが、ふと掠めてしまう。

・・・

台所に立つ母親の姿を眺める。

いつもの景色・・・景色・・・景色・・・。

そう、これが何時もの光景だ。

だが、何かが、違うような気がして。

何が違うのか、何か決定的な違いがある気がして、それが何なのか
分からない。

「散歩行ってくる」

そう言い放ち外に出ると、いつも、の路を歩み始める。

そこから見える藍色がかった空、壁に囲まれた道路、その先で下る
路の先に広がる街並。

その先の海。

いつものままだ。

でも、何故だろう・・・。

僕は、こことは違う何処かに居た。

その風景を思い出そうとしても、思い出せないけど。

確かに、その場所に居たような気がするのだ。

ここはすごく綺麗で。なのに、そこが、とても懐かしくて。

僕は・・

Realize Network 1 (1)

「ハヤトー!」

「ん．．」

「見つけたー」

・風華か。

道路からこちらへ駆け寄りながら、

「ここにいたのかー」と少女は言う。

彼の目の前まで来ると、

「また海かー」

海の方を見やりながら風華が言う。

「そう。また海。」

海の向こうの、遠い空を眺めながら答える。

「．．．．」

「．．．．」

「なんかな、海を見ると、その遠い先に、何処か別の世界が広が
ってるような気がする。」

「．．そりゃそーだろ。」

そういう意味じゃないんだけどな。

少女が横に、よつと腰掛ける。

「今日さー、何かする？」

と少女が聞いてくる。

それは、彼女のよくある問いかけだった。

この少女との付き合いは、そう長くもない。

同じ高校、同学年だが、この少女とはネットの中で会うことの方が多かった。

速人が一人ブラブラしているときは、連絡機能付きの機器類を持ち歩かない場合が多く、そんなとき、風華は、彼のよく行きそうな場所にこうしてやってくるのだ。

「面白いのあるんだけどー」

「ん、ネット？」

「うん。今夜辺り、行かない？」

「いいよ。」

風華が面白いの、と言った時、それが外れた試しは殆どない。

「じゃー、あとで連絡いれてねー？」

「夜にね。」

「うい。」

「んじゃねー」

乾いた流木から立ち上がると、少女はどこぞへと向かって小走りに駆けて行った。

その姿を見送ると、また遠く空に目を戻し、そして、瞳を閉じた。
漣の音を、心に感じながら。

彼は高層住宅の上から数えた方が早い辺りに、一人で住んでいた。
部屋は広すぎることもなく、狭いと感じることもなく、

防犯上一応は閉めた方がいいのだろうが、窓は何時も開け放っており、部屋に入ると、流

れ込む空気が、優しく肌を撫でた。

夕暮れ前の、弱りかけた日差し。

それが、元々デザインも悪くない室内を、それなりにいい感じに照らし出していた。

彼が帰ると、帰宅を感知したコンピュータが一連の設定に基いて、ライトが点灯させ、スリープモードだったコンピュータがONになり、コーヒーマーカーが作動し、ついでに風呂まで沸かし始めた。

ダイブ機能付きのイスに腰掛けると、メインモニタがアクティブ化する。

サブモニタが開かれ「おかえりなさい」と擬似人格プログラムの彩

香が彼を迎える。

「風華さんから、メールが届いてますよ。」

ちよつとしたメッセージとか、簡易に済ませたい場合は、未だにメールなどを用いることが多かった。

「多分、今夜のことだろ。開いて」

サブモニタが開かれ、そこにメッセージ表示される。

「こんちわー。夜、行く場所だけど、ここのサイトに簡単な説明載ってるから見といて」

ファイルはこっちから転送しとくからー。じゃー夜、そこで会いましょー

ではねー

風華」

「ファイル転送しますか？」

「うん、やつといて。風呂入ってくるから。 転送終わったら、有効化しといて」

・ ・
・ ・
・ ・

気が付くと、小音量で柔らかな音楽が流れていた。
街の明かりが窓から差し込んでいるため、目を開いても真っ暗ということはなかった。

風呂に入って汗を流した後、軽く夕食を摂って眠っていた。

「悪くない目覚めだね」

「それは、よかったです」

時計を見ると、7時28分を示していた。

「ん．．そろそろ風華に連絡するか」

「風華さんに繋がりますか？」

「うん。繋いで」

サブモニタがアクティブ化する。

「音声通話です」

「おっ？ハヤト？ やっほー。 準備できてるー？」

「綾香さん、準備できてるかな？」

「有効化は完了しています。 風華さんのアカウントがあれば、友達招待モードで、体験的プレイが可能です」

「だってさ、大丈夫？」

「うん。プレイシナリオはこっちで選択するから、要請来たら、受諾してくれればおっけー」

「了解。じゃ行くか。」

・
・
・

序章3 何時もの場所 & 序章4 旅立ち

序章3 何時もの場所

何処か遠くから、意識が戻ってくるのを感じた。
ここが現在、いつもの場所だということが分かる。

ふと目を開く。

薄暗い室内。主人の覚醒を感知したコンピュータが、照明を点灯させる。

照らし出された室内はいつも通りで、自分がかけていた背もたれから軽く横に顔を向けると、

螺旋状に舞い上がる青い光のオブジェが見える。

ゆったり上って行くそれを見ていると、どこか心が落ち着く気がする。

長くて、リアルな夢を見続けていたような気分だった。

段々と、静かだった精神が、暖かく活動を開始し、それに伴って体が温かくなっていく感じがする。

落ち着いた体を動かし、空間投影されたモニターにサッと指を走らせる。

薄暗くなった外の景色を透過する窓が開かれ、レースのカーテンがやさしく吹き上がる。

その風を感じながら、ゆっくりと目を閉じる。

夢見た後の様な、その余韻に浸りながら。

序章 4 旅立ち

「さとし、さとし！」そう呼ばれて気づいた。

そう、目覚めたときは、そこが夢の世界なのか、現実の世界なのか区別がつかない状態で、

ただ薄暗い場所だな、という印象だけがとても強かった。

ここは・・・？

そう思い、母親の方を見上げる。

そこには腕を腰に当て、暗くて分からない表情でこちらに任王立ちしている姿が見えた。

それは顔の黒い人間の姿をした化け物のようで・・・

・意識・がはつきりしてくる。

それにしたがって、・自分・の置かれている状況に対する認識が、
復活・する。

それがおそらく、思い出す、という作用なのだろうか。

そう、ここが・僕・の居た場所。

ここに居た。そう居ただろう。そう記憶が告げている。

そう、居た。

だが、つい今しがた、今とは違う場所にも居た。

「また夢の世界に行ってたの？」

「・・・」

・・夢、とは何だろう。正確にこれが夢、と分かる理由は何だろう。

夢、なのか。ただの夢想なのか。

いずれにせよ、僕は違う何処かに居た。

・・だが、それだからと言って、それが何なのだろう。

ここに居たにしろ、そこに居たにしろ。

何処が僕の場所かなんて、誰にも分からない。

そう、ここにしろ、あそこ、にしろ。

そこが、何処であれ・・

それよりも、ここが自分の場所だという、押し付けがましい認識ほど迷惑なものもない。

「さとし・・・いい加減、目、覚ましなさい。」

「・・・ん？」

・・・目を覚ます・・・？ 何処で・・・？

「・・・どこで？」

「はぁ・・・？」

母親はその言葉にきょとんとした様子で立っている。顔は見えないが。

・・・そんなことを聞いても仕方ないか。

おもむろに立ち上がると、・母親・の脇を通る。

「散歩に出てくる。」

ポカンとした様子の母親を、残したまま。

この街はなんだ・・・？

夕暮れ間近の町並みを見下ろす、学校の屋上のより一層高くなった
出入り口の上に腰掛け、ゆったり流れる風を感じながら、一人、思
いに耽る。

何故、僕はここに居るのだろう・・・？

正確には「この世界」といべきか。

そう、こことは違う何処かがあると、何処か遠くで確信している。

こことは違う、場所に行く方法、．．そう、僕はそれを一つしか知らない。

それは．．

風を感じている。

少し強めの不快でない風。

視界には、林立するビル郡と、米粒になった車の流れ。

そこから飛び降りたとして、どうなるものでもない。ただ、逝くだけ。そう、別にどうということではない。

それは分かっていた。

「僕」にはこの方法しかなかったから。

肌に風を感じ、自然と目を閉じた。力がフツと抜け、その場に自然に倒れて行く。

そう、その先に何があるのか、確かめるために・

Realize Network 1 (2)

「ハロー」

半透明の黒いチャットウィンドウがアクティブ化する。

声と一緒に文字が出てくる。

何故音声通話でチャットウィンドウがアクティブ化するのかは未だ不明だが、

その陽気な明るい声は、おそらく風華だろう。

「誰？」

「……ちよつと表でろー!？」

それまで周囲を取り囲んでいた景色が遠くなる。

「ハヤトさん……音声通話です……」

「あい」

「風華だよー!？」

「うん。そうだね。」

「わかってんのかコラぁー？」

「ねえ、これってどんなゲームなの？」

「・・・うん。ってスルーしてるしい・・・。まあ、いいや。えっとね・・・」

「早い話し、体感ゲームだよー」

「体感ゲーム・・・・・・?」

「やってみよー。それが早い、うん。」

何か引つかかるものを感じたが、何時もの風華の感じだと、間違いということもないように思えた。

「まあいいや。どうすればいい?」

「こっちで、シナリオに誘うからー、それに参加してくれればいいよー。」

「わかった。じゃあ、向こうで。」

「はいよー。」

遠くなっていた景色が近づいて、周囲を取り囲む・・・それと同時に街並みにの雑踏や、鳥の鳴き声、風の葉擦れの音、肌を感じる空気の流れ、温度、様々な感覚がフィードバックし始める。

「よーお!」

「誰?」

「・・・」

「ちょっとおー！？表でろおー？」

「いや、それはもういいから。笑」

「ほい」

ウィンドウが開き、風さんからシナリオ参加要請が届きました。参加しますか？

とのメッセージが表示される。

「OK、参加するよ。」

そう言うと、メッセージが受諾。に変わる。

それまで、周囲を取り囲んでいた風景が、フェードアウトしながら遠くなっていく。

そして、僕は、ある世界で目覚めた。・・

Realize Network 1 (3) & (4)

本編 1 (3)

その街並みは雪が降っていた。

古いヨーロッパの田舎の様な街並みに、空は曇り、夕暮れ時の暗い雰囲気を、街の明かりが、暖かい雰囲気に変えていた。

目を覚ますと、ベッドの上に横たわっていた。

室内は暗い色調で、本棚や机、暖炉にドア、どれも古めかしい具合で、暖炉の炎が、室内をやわらかく照らす照明になっていた。扉の曇りガラスの外も、余り明るい感じではなかった。

起き上がると、その扉から表へ出る。

扉を開けると、濃い曇りガラスからは伺えないほど、空は曇りなのに、明るさを感じられた。

その光源と一緒に、目に飛び込んで来たのは、古い街並みと風に舞い落ちる上空からの雪。

その光景に、ボヤけていた意識が目覚めたような気がした。

そして、体の違和感に気づく。
その風景も魅惑的だったが、それを確認するために視線を下へ落とす。

「……」

なるほど、風華が具体的に語らなかった理由はこれか。

・シナリオを体感するゲーム・

そんな風に言っていたように思う。

「なるほどね」

・この体・は女の子、だった。

少女役って訳か。

「綾さん、風華に繋いで。」

「はい。繋がりますね。」

古いヨーロッパの街並みに、半透明な水色のディスプレイが表示される。

「はい、なに？」

「あのさ、このシナリオって、どんなの？」

「うーんとねー。それは、言えないかなあ。」

「・・・まあ、いい。それじゃあ、風華はさ、何の役？」

「へへへーっ それも秘密だよー。この街で出会っ誰が私か、分からないってのも面白いでしょ。」

「じゃあ。。質問を変える。・・・こっちが何の役か、ってのは、そっちは分かってる？」

「ふふふ・・・それは。もちろん。」

「・・・まあ・・・いい。」

「ふふふ それじゃ、楽しもうね。」

「・・・はいよー。」

そう言って片手をふんわりと上げた。

・・・なるほどね。

上空を仰ぐ。

「そういうことだったか・・・」

空は相変わらず淀んでいる。冷たい微風を感じつつ、これから始まるであろうシナリオに思いを馳せた。

本編1（4）

雪降る街並み。古いヨーロッパ調の街並み、季節は冬。時折吹く風に雪が軽く吹雪く。

- いい感じの街並みだな。

その冷たい風を感じながら、シナリオが開始されるのを待っている。半透明のウィンドウが開く。

「もうすぐ、シナリオが開始するようです。」

綾香さんが、そう告げた。

「わかった。」「自分は、このまま待つてればいいのかな？」

「はい。・・・時間がくれば始まるようなので、それまでは自由していて大丈夫みたいです。」

「了解。ありがとう。」

「それでは、楽しんでくださいね。」
「はいよ。」

ウィンドウが消える。

・・・それにしても、この待ち時間は何に対するものなのだろう。
風華と自分以外に、参加者がいるのだろうか？

まあいい。。あまり深く詮索するのは、止めておこう。

「・・・間もなく、シナリオを開始いたします。。・・・カウントダウンが、開始されます。」

そう告げるシステムメッセージが流れると、その街並みに、30・・・29・・・とカウントダウンが表示され始める。

1	2	3	4	5
・	・	・	・	・
・	・	・	・	・

「シナリオを、開始いたします。」

そう告げるメッセージがアナウンスされると、視界が遠ざかり始める。

雪降る世界が、遠い彼方に、消えていく。

そして、視界は暗くなり、意識が、遠くなっていくのを、感じた・。

Realize Network 2 (1)

「イフェリナ・イフェリナ」

・暗い視界の何処かで、誰かの呼ぶ声がする。

・この声・・・お母さん・・・？

頭の片隅で、その可能性が示唆されたとき、今まで自分が、夢の世界にどっぷり浸かっていたことを認識した。

そう、私は、そこに居た。

その世界で暮らしているかのように感じていた。

それで、私がいた現実世界のことを、すっかり忘れていたんだ。

そう、少なくとも、そう呼ばれる世界を・・・

意識が覚醒して行くのを感じる。どんどん現実感・・・現実に対する認識が復活していく。

そう、ここが私の居た世界・・・そして、これからも居るであろう世界。

「イフェリナ」・・・意識が覚醒する。

「・・・」目を開く。

そのまま少し、ぼんやり天井を眺め、母親の方へ視線を向けた。

「ご飯できてるよ。」

そう微笑むと、母親は、戻っていく。

長い夢の中に居たせいだろうか？いつも見ている筈の景色が、新鮮に感じる。

窓の外に見える、呑気な田舎の街並みと晴れた青空と雲。吹き込む風。

室内はいつも通り。それを確認するかのように、周囲を見まわしている。

「うん。私の場所。」

瞳を閉じ、そう、確かめるように。。

ベッドから抜け出すと、パジャマ姿から着替えるため、クローゼットを開く。

「・・・・・・」

その内側の鏡に映っている自分の姿に、一瞬静止する。

「・・・・？」

あれ？・・私、こういう顔だったかな。。？

長い、夢の中に居たせいだろうか。

見慣れている自分の姿にさえ、どこか違和感のようなものを覚えた。

・・・すぐ、いつもの自分に戻るよね。

着替えを再開し、そして、それが終わると、朝食の準備ができた一階へ向かった。

「こんにちは」

一階へ降りる階段の途中で、そんな声が聞こえてきた。
ん？・・・誰だろ・・・
と一瞬、思いかけて、そこで記憶が蘇る。

あ。

・・・

「イーリア。」

そう微笑み、呟いたのは、彼女の親しくしている、少女の名前だった。

そして、彼女の中で、今日が休日だという認識と、周囲の世界に対する認識が復活し、ゆっくり活動を開始する。。

階段からダイニングに顔を出すと、扉の開いた玄関に、その少女の姿が確認できた。

「あ イフェリナ」

「こんにちわ。イーリア。」

特に休日にはよく、彼女を元を訪れる、その少女。イフェリナは、その少女のことが、とても好きだった。

「イフェリナ」 今日どこかいくー？」

ふと、何処かで聞いたようなセリフだと感じた。．．
だが、それが何処だったか、よく思い出せない。

「うーん。いつも行ってる場所ぐらいしか思いつかないよー。」

広くもなく狭すぎもない田舎町。

彼女には、目新しい場所が、思い付かなかった。

「じゃー、久しぶりに、街行く??」

「。。。うーん。そうだね。それじゃー、いこっか。」
少し間を置いてから、少女が笑顔で答える。

「あまり、遅くならないようにね。」
母親が微笑む。

「うん。ありがと。」

軽く朝食をとり、準備が整うと、表へ出た。

いつものように。そういつものように、その親しい少女と会話をしながら、駅へと向かった。

陽光に照らされ、・・・その温かさを、・・・素肌に感じながら。。

Realize Network 2 (2)

雪・

その場所は、雪が降っていた。

少女の住む田舎の街から、割と離れた所にあるその街。

・それほど離れていないのにな。

ふと吹いた突風とも呼べない強めの風に、雪がブワツと舞う。

空には厚めの雲がかかり、薄暗い天候の街を、街灯が照らしている。
何処か幻想さを想わせるその景色に、しばし見入っていた。

「イフェリナ。」

ふと名前を呼ばれる。

一瞬あとに、後ろを振り向く。

それが自分の名前だと、わずかな瞬間、気付かなかった。

「？」

表情でそう疑問を浮かべると、少女がにこつと笑って言う。

「いじ。」

「。。。そうだね」

その街の雰囲気にもまれてるように、何処か落ち着いた面持ちで彼女は答えた。

・なぜだろう。知っている筈の場所なのに、知らない場所でもあるかのような気がする。

歩きかけると、少女が振り返って、

「楽しもうよ。」

そう言った。

「。。。」「少し目を閉じ、」「うん。そうだね。」

微笑んだ。

それにしても・・・

・何処かで見たような風景・・・

そう頭の片隅に、浮かぶ疑問。・・・何故、そんなことを思っただろう。

何を・・・忘れているのだろうか？

-・・・おかしいな。私。。

軽く俯き、ゆっくり首を振ると、少女の後を追ひ、テクテクと歩き始めた。・・・

・
・
・
・

・
・
・
・

・
・
・

・
・

「おい イフェリナ」

街の風景を眺めながら、少女の後について歩いていると、ふと名前を呼ばれた。

「？」彼女の方を見ると、一つの明るく灯されたショーウィンドウの前で、少女が手を振っている。

「・・・」微笑むでもなく、軽く表情を和らげると、そこへ近づこうと、歩いていく。

その時、彼女の眼の前に、さまざまな映像が、連続で、フラッシュバックされた。

「！」

街の風景に透過されるように現われたそれは、不意に断ち消えると、元の景色へと戻った。

「あれ？」

ショーウィンドウを覗き込んでいた少女が、何かに気づいたように振り返った。

「ねーねーおいでよ？」そう言って笑う。

「あ。うん。」

だが、何か気になり、上空を見上げる。

ゆったり舞い降りる粉雪。その先の淀んだ空を眺めながら、そこに何かを見出すように、目を細めた。・・

「ん？。。どうしたの？」

見上げていた顔を下ろす。

「ううん。」

「・・」今度は街路の方へ、視線を移す。。

・・

「私は、・・何かを思い出そうとしている？

俯いて目を瞑る。・・薄目を開け、何かを考えようとして、近くの少女が、少し困った顔で、私に何か話しかけているのに気づき、止めた。。

「あ。うん。・・。いこっか。」そう微笑んで、歩き始める。

「どうしたのかな。イフェリナ。」

少々困った笑顔で、隣を歩き始める彼女。

「・・どうしたのかな、私。」

ふと、眼を閉じる。・・

そこは暗い世界。・・不意に、周囲の世界の音や気配が、遠のいた。

意識の中から、それらに対する認識が、消えていくかのような。
そんなことを感じていると、世界が遠のいて行くのが感じられて、
あらゆる感覚が、遠くなっていき、・・そして、ついに消えた。

・
・
・
・

・
・
・
・

・
・
・
・

・
・

ふと眼を覚ますと、・・といっても、寝ていたわけではない。
そこは、とても見覚えのある部屋の、その、倒された背もたれの上
で、横たわっていた。

「・・おはようございます。・・軽く音楽でも流しましょう
か。？」

そう、聴きなれた声。

・おはよう。か。

「今、時間は・・？」

「今、2時を、少し回った所です。」

「そうか。。」

「楽しめましたか？」

「・・・それなりにね。」そう言って微笑む。

「・・・あ。風華さんから、通信が入りました。」
「繋がりますか？」

「ああ。つないで。」

「おい。どうだったー？」

「・・・」

「あれが風華とは限らないな。」

「・・・なかなかいい目覚めだった。・・・笑。」

「そうじゃなくて。。。」

「あのさ、風華は、出てきた？」ダメもとで訊いてみる。

「うん。どうなんだろうね？」

「まゝ。後でネタばらしするよ。」

「そっか。わかった。」ふと眼を閉じ、そしてまた開く。

「またな。」

「うん」

「じゃね〜」そう言つと、空間に展開していたモニターが閉じ、通信が終了する。

・・・

背もたれに頭をのせ、薄目を開けて、ゆっくり空気を吸った。

あの世界での出来事。

そう長く居たわけでもない。

・・・ちくしょう。シナリオの続きが気になるな。。

「はは。」苦笑い。・・・

「どうしました？」

モニターの中の彩香さんが、そう問いかける。

「なんでもないよ。・・・また続き、やろつと思つ。」

「そうですか。」と微笑む。

「うん。それと、このまま眠るよ。」

「はい。。。。おやすみなさい。」

「あ。。音楽、かけといてもらえる?」

「わかりました。」

彼女は、．．終始笑顔だった。

．

．

．

すぐ、眠りへと落ちる兆候が表れ、ゆっくり、ゆっくり、その中へと、埋没していく。

．．．明日は　．．何をしよう．．

Realize Network 2 (3)

学校の屋上。その縁に腰掛けて、遠くの景色を見ている。

本来であれば、入ることのできない場所、何故ならそこには、落下防止の金網が、一部欠落していたからだ。

冷たすぎず、ちょうどよい空気の風が、肌をなで、通り過ぎていく。

夕暮れ時、その遠くに落ちていく丸いオレンジを眺めている。

その前に佇む街並み。それも茜色に染まり。当然のように、赤一緒に染まった世界。

・さて、家へ帰るか。

心地いい空気に包まれたまま立ち上がり、家路につく。

ポケットから取り出した鍵で、ドアをしっかりと施錠して。

ひとつ風呂浴びて髪を拭きながら出てくると、「ハヤトさん、風華さんから通信が入ってます」

と彩夏さんが伝えてくる。

「ん？つないで？」楓華の顔を映したサブモニタが映る。

「ハロ　ハヤトー」

「ん？なんだい？」

「あのさあ、今日、いい？」

「ん、あれか？」

「うん、ちょっと今夜続きやりたいなあと思って。」

「・・・まあ、続きが気にならないということもないからな。
いいよ。」

「なんか、冷めてるね」

「うん。時間が経って、なんか、冷めてきた。」そう少し笑う。

「うん、またやれば、絶対はまるって」

「そうかなー？　。。何か、別のシナリオはないの？」

「あるけど、今が一番お勧め」

「うん、やっぱり、何か自分で探してみるよ」

「そっか。じゃあ、気が向いたら、後で声かけてね？」

「ああ。じゃな。」

「うん。」そう言って、通信が途切れ、モニタが閉じた。

それから彼は、プレイシナリオの概要を記したページを色々と見、面白そうなシナリオを探した。

それから数日して、

いくつか体験プレイ可能な部分をプレイし、物語を体験してみたが、これ、と言えるものには出会わなかった。

そんなとき、風華からまた連絡が入る。

「ハロー 風華だよー」

「・・・ないね。」

「・・・えっと、って、なにが？」

「プレイシナリオ」

「・・・」

「ちょっと、散歩に出てくる」

「あ、うーん。いつてらっしゃーい」

散歩から戻ると、いつもの椅子にドン、と腰かけ、背を預ける。

今他にしたいこともないしな。

風華の策に乗るような気がしないでもないが、続きをプレイしてみるか。

「彩さん、」

「はい。なんでしょう」笑顔で彩夏さんが現れる。

「風香に繋いで欲しい。ゲームの続きしようって。」

「はい。わかりました。」

「・・・今つながらないようですね。オフラインメッセージ残しておきますか？」

「うーん、そうだね。。じゃあ、後で続きしようって、伝えておいて。」

「はい。そうしますね。」

風呂に入ったり、軽く軽食を作って食したりして、時間が経過していった。

TVのニュースを何となく眺めていると、通信受信の音楽が鳴り、きつと風華からだろうと、思い当たる。

モニタが開くと、やはり風華の姿がアップで表示された。

「ハロー。風華だよー」

「ん。？」

TVから顔を横に向けると、その笑顔が表示されていた。

「よっ」

「伝言みたよ」 「やるの？」

「ああ、他にないしね。」

「そっかー」

「・・・今から行くー？」

「そうだね。見ての通り、やることもなかったし」

「じゃあー、向こうで待ってるねー」 「そういつて軽く手を上げ軽く振られ、モニタが閉じた。

Realize Network 2 (4)

目覚めるとそこはベッドの上。

白いシーツ、女の子らしく詠えた模様。

レースのカーテン、吹き込む風、

以前見た室内と同じ、違うのは、天候による雰囲気の違い、というぐらいだろうか。

「・・・」

ふと気付いたのは、今回は記憶がある、ということだろうか。

前回入ったときは、元居た世界での記憶が思い出せず、この世界でのキャラクターの記憶が主になっていた。

風華が気を利かせたせい、ハヤト、としての記憶を持ち合わせたまま、この世界にINしてきていた。

まあ考えてもみれば、元居た世界での記憶が消えている、というのも危ない感じがする。

その辺が大丈夫に設定されていなかったら、そんな設定が許されているはずはないが、

記憶があつた方が、違った自分、になる楽しみを味わえるのではないかな?とも思える。気のせいかもしれないが。

しかし、ここまで女の子の子した格好をしていたんだな。

記憶を持ったまま改めて見ると、そんな格好をしている自分、それが今の自分の姿なのだという感覚に、

少々恥ずかしさを覚える。と同時に・

「イフェリナー?」

階下から、母親(この世界でのイフェリナの母親)の呼ぶ声がする。

とっさに、「あ。はい。」とカワイイ声で返してしまった。

「・・・」

これは、前とは違う。。

どうやらイフェリナとしての記憶は働いているようで、この世界でなりきる、ことは可能な気配だった。

「これは。。計算してないか。?」

何か計られたような気がするの、気のせいだろうか?

おそらく朝ごはんが出来てということだろうから、この格好で下

に降りるわけにもいかないから、着替えて降りたほうがいいだろうか。。？

なんか思考が今一つ十分に働いてないような気がするが、取り合えず、それとなく働いているイフェリナの記憶を頼りに、着替えて降りたほうがいいだろう、と判断した。

家族だから、寝巻のままでいいということはないだろうか？と思いかけて、リビングが玄関と直結していることを思い出した。

そういえば、そうだった。

「・・・着替えるのか。」

以前は抵抗もなく、何の疑問も抱かずに、それが普段通りことであるように着替えていたが、

非常に、あれだ。。

・

・えっと、どうやって、着替えるんだっけ・・・？

木製の古びた色合いの濃い茶色の階段を少女が降りてくる。

その顔は何か参ったなあ、という感じで赤味が帯びており、ふうふうと熱い？息を吐き出している。

「イフェリナ。？ご飯できてるよ。」

そう言つてほほ笑む彼女の母。

「あ。うん。。」

食卓の椅子に腰かける少女。

何処か潤んだ瞳は、朝食を見ているようで、何処か遠くを見ている。

「イフェリナ、今日はイーリアちゃんと、約束があるんじゃない？」

「？」不意にそう訊かれて、何かを探るように、その目を泳がせる。

そして、何かに思いあたったように

「そうだった。約束あるんだった。今、何時かな？」と言って、何処か夢から覚めたような顔で、時計を探している。

「あゝ、まだ時間は・・・ある、かな。うん。大丈夫。」

「？」

母親がきょとんとして疑問の表情を浮かべている。

「着替えは・・・？ 済んでる。。」下を見下ろして、そう言つ。

「??」

少女は、少々混乱している。

「あはは。出かけてくるね」そうにこやかに笑うと、まだ殆ど手を付けていない朝食を残し、肩にバッグを掛けると、表へ出た。

「・・・と、何処で待ち合わせだっけ。？」

外に出てきてからそう思った。

・そんな約束したっけ？

でも母親が覚えていたのだから、約束はした筈だ。

・・・・

思い出そうとしてみるが、イフェリナの記憶がうまく働かず、思い出せない。

・うーん。

「つ・・・(うしんは使えない。)」

- イーリアの家は、何処だろう。

不意に、玄関の扉が開く。

「あ。ちょっと忘れ物。。」

そう言つて二階にトタトタ駆け上がっていく。

相変わらず、レースのカーテンが風にふわりと舞っている。

机の引き出しを開け、何かないかと探す。

- ...手帳か。。

ページをパラパラと探っていく。

イーリアの家の場所、とかは載ってないか。。

.....

- あ。

実にシンプルな回答がそこに。。

時計屋さんの前で待ち合わせ

時計屋・・・というと、自分が知っているのは、前回プレイ時に、出てきた時計屋だな。。

ーうーん、そこ以外、知らないし。。

街の一角、天候は晴れ、まばらな雲が空をマールに染め、その下に両膝に手をつき、ショーウィンドウを覗き込んでいる少女が一人。緩やかな坂の中ほどにある店。

その街並みの街路、建物に囲まれた風景の間を、涼やかな風が吹き抜けてくる。

天候は穏やかで、冬場にしては暖かい陽気、吹き抜ける風を、心地よく感じた。

その少女の後ろに、少々息を切らせたちよつと背の高めな女の子の影がひとつ。

「お、お待ちせし」

「？」と振り返った少女。

「イーリア」そう言って微笑む

「あ
」

名前を呼ばれて気がついたように、少女の方も微笑みを浮かべた。

「いこつか。」と、そう微笑みのまま言うつと、

「うん」と少女の方も、その笑顔のまま応えた。。

Realize Network 3 (1)

「こんにちは」「イフェリナ」

「ん？」窓際の椅子に腰かけて、頬杖をついて葉擦れの音を響かせて吹いてくる風を感じながら、考え事をしていた彼女。

「今日はね」あや・・・じゃない。えっと・・・「そうやって隣を見やる少女。」

「どうしたの？イーリア？」

「アヤカです。」「ニコッ。」「え・・・っ」

「？」

「あ・・・っ、って、あれ？アヤカさん？初めまして、でしたよね？」「そういつてほほ笑む。」

「あー・・・」

「ええ。初めまして。」「そういつてほほ笑み返すアヤカと名乗った少女。」

「・・・？イーリア？」

「あはは なんでもない^^」

「??？」

「あ。今降りるね。」

そう言つて階下にトントントン、と降りていく。

その外で、風に吹かれながら、話し込む2人。

「今完全に入っちゃってるんだね・・・」

「ええ、データではそうなってますね。。」

アヤカと名乗った彩香さん、（そのまま）は、その登場人物にふさわしい少女らしい姿で、にこやかにほほ笑んだ。

「ガチャ」

と扉が開くと、その普段運動をしない軽く上気したほほの朱い少女が飛び出してくる。

少女、と呼ぶべきか。少年、と呼ぶべきか。

この世界では彼女、は、段々とイフェリナの人格寄りになって行つたというか、

イーリアにもわからないのだが、どういう設定がなされているのか、

段々と、この世界にいる時には、元の世界での記憶を喪失し、イフエリナ、としての性質が強くなっていった。

今では完全に、こちらの世界にいるときは、イフェリナという少女のそれと相違なかった。

「・・・大丈夫かな？ハヤト・・・」

何か、イーリアには、いや、風華には、ハヤトが何処か、居なくなってしまうような気がしてならなかった。

元の世界に戻っても、もうハヤトには会えないのではないか、そんな気がして・・・

プレイ期間の終了する前での間、こちらの世界で過ごすことになっている今回。

「（彩香さんは、・・・AIだから、何か情報持ってるんじゃないのかな・・・？）」

わからないけど。

どうしよう・・・、途中でプレイやめることもできるけど、

全然なんでもなかったら、他のプレイヤーに迷惑かかりそうだしな
！・・・

あとで、彩香さんに聞いてみよう。・・・情報持つてなくても、何か調べて貰えるかも・・・

近くの木陰で話しているアヤカさんと、ハヤト？を見ながら、一人考えている風華。

「^^？」
（ふとこちらに気づく少女。

「あ。。」

その無邪気な表情を見ると、特に問題なさそうにも見えない。
— 見。

「（考え過ぎだといいけど・・・）」

Realize Network 3 (2)

「おっはー。ハヤトー」

「あ。おはよう^^」

その反応に一瞬寒気を覚えた少女。その名は風華。

何かが違う。

特になんとわなない会話。ただのあいさつ。

「ん？どうしたの？^^」

その顔でにこやかに返されても・

その瞬間、風華の世界が何処かで音を立てて崩れていくような、そんな気がした。

風華の中の、何か肝心な何かが、失われてしまったような。そんな直観だ。

「あのさ、ハヤト。」何時になく（表情はにこやかだが）シリアスになっている？彼女。

「ん？」そういつてほほ笑む・・・誰？

「イフェリナ？」

「ん？なに？　　・・あ。」ほほ笑んだ顔のまま固まる。

「あ。あゝ・・」

「あ、あつははゝ。　　なんか、向こうでのキャラ、覚えてなくてな
くてさ。」

そう言つて頬を軽く指でかく。

風華は直感していた。

この人は、イフェリナだ・・

「えつと、　・・じゃあ、またね。」そう言つて、いつものハヤトラ
しからぬ、呆気ない態度で、去っていく彼・・

「・・・あゝ・・」これは、まずい。何が？　・・まずいぞ？　・・

風華はモニターの前で、その画面を見つめたまま。固まっていた。
ハヤトに連絡するか？

いや、連絡してもしまったあのキャラで返されたら・・・

でも、もしかしたら、もう、元のハヤトに戻ってるかも。？

でも・・・

もし・・・

「・・・秘匿通話・・・彩香さんに繋いで？」

「はい？」

「あ。彩香さん、風華だけど。」

「はい^^」

「あの、・・・あのゲームについて、調べてほしいんだけど。」

「あのゲームというと、先日プレイした、あのゲームですか？」

「うん。」

「ハヤトが、・・・おかしいから。」

「ハヤトさん？」

「うん、学校での様子も、変だったから。なんか、女の子みたいだった。いや、男だけど。性格が・・イフェリナだよ、あれは。」

「家では、別段おかしくないですけど。。」

そう言って彩香さんはほほ笑む。

「え・・」そんな筈ないんだけど。

風華は、また何か感じたようで、彩香さんも何かおかしい、気づいた。

「うん。わかった。・・何か様子おかしかったら、連絡貰えるかな？？」

「わかりました^^ そうしますね。」

「うん。それじゃあね。」何とか微笑みを作ると、通信の終わった画面を見つめたまま、しばし時間が経つ。

「どうしよう・・」

Realize Network - 本編 - No. 1

それから数日して、学校へ行くと、奇妙なことが起こった。

クラスを除くと、いつも通り賑やかなクラスの中心に、女の子が集まり、その中心に、一人の見知らぬ少女が輪の中でほほ笑んでいた。

「?」・・・誰かな?

でも何処か、初めてとは思えない雰囲気を持っているその少女。

どこかで・・・会ったかな?

「こんにちは」

近寄っていつて挨拶すると、

「あ^^」と少女が笑う。

「え・・・?」その笑顔に、どこか寒気を覚えた風華。

笑いかけた笑顔が、半ば崩れたまま凍りつく。

直観的な少女。よく気がつくね、と言われることはあったが、こういったこと、によく気がつく、ということは周りにあまり知られていない。

「こんにちは。」

一瞬、「あゝハイリア。」とか返されるかと思った彼女は、ちょっと拍子抜けした感じで。

あれ、・・・思い過ごしかな・・・

「初めまして。」そうほほ笑むその子。

「あ、・・・あゝ初めまして〜。」

雰囲気、彼女に似ていたから、あり得るはずはないのに、イフェリナがこの世界に現れたのかと思ってしまった。

簡単な自己紹介を終えると、軽く挨拶して、ハヤトの姿を探し始める。

「ん・・・今日はまだ来てないのかな。」

それから、ハヤトは現れなかった。

教師の説明によると、（彩香さんからそんな話はなかったが）病院に入院したらしい。

あれ？と思った。

原因不明の急病らしく、意識不明で面会謝絶という話だった。

その話を聞いて、「え・・・」と言葉のなかった少女。

（・・・お、かしいな・・・なんで・・・？）

病院に一応赴いて、近しい友人であると告げても、やはり”彼”に会うことはできなかった。

意識不明だから、姿を見るぐらいで、話すことはもちろんできないが、

彼女には疑問があった。半ば信じ切れていない。本当に、そんなことになっているのか、自分の目で確認したかった。

「（・・・どうしよう。。彩香さんに連絡入れて・・・でも彼女は、
・何かおかしいんだよな。）」

AIを使っていない風華。

調べものなどは、自分ですることが多かった。

彼女が設定したAIを、なぜハヤトに送ったかと言えば、それは彼が、機械音痴というほどでもなかったが、コンピュータやネットについて、少し使いづらい側面を感じていたからだった。

それを見た風華が、AIを導入することを勧めたのだった。

ちよつと、調べてみる必要があるかな。

彼女がそう思ったのは、AIが勝手に暴走することは考えにくいのと、裏で誰かが糸を引いている、そんな意図を感じたからだ。

携帯端末で、自宅のPCにアクセスする。

そこからリストを呼び出し、あるネットの知り合いの連絡先を引き出す。

”彼” いや、彼女？（性別不明）なら、何か調べられるかも知れない。．．

一人で動くのは、何か危険な香りがした。

何となく、そう何となく、彼女が感じていることだった。

彼女は学校に顔を出すと、そのイフェリナに雰囲気似ている少女と話す。

「（どうも・・・これは・・・とてもハヤトと関連している気がする。）」

そのこちらのことを知らない？少女と話しても、何か情報を引き出せるとも限らない。

だが、何か、とっかかりのようなものを掴めるのではないか？いや、もしかしたら、掴めるかもしれない、程度のものだったが、

藁にもすがる思い、というのは言い過ぎだが、今の彼女には、何をどうすれば”答え”を引き出せるのか、未だ分からなかった。

ある時、ふと、そう拍子抜けするほどに、”面会謝絶”が解除された、との一報が告げられた。

「え・・・」それは意外な展開だった。彼女にとっては。

彼女の行き過ぎた考え、そう思わせようとするかのように、少なくとも、その時は、そんな風に思えた。

彼の存在を隠匿する何らかの裏の意図が、働いていると考えていた。だが、病院で依然、意識不明のまま横たわっているハヤトの姿を見た時、

それまでの疑惑が溶解していくような感じがして、いや、まだ早い。
・・・

ベッドの周囲の状況を確認して、通信回線などと繋がれていないかなどを、目認し、

一人のときに、実際に周囲の状況を軽く調べた彼女。

「・・・」何もない。

それまでの疑問が崩落していくのを感じた。

じゃあ、彼女は？・・・イフェリナに雰囲気似ている少女。

それと、ハヤトの異変・・・

おかしい・・・

でもこうして、特に何もなく、ハヤト・・・？はベットで長い眠りに就いている。

「あれ・・・」 両の瞳から、涙が零れ落ちる。「・・・何やってんだろ・・・私。」

「ハヤト・・・」 その手を軽く掴む。「・・・待ってるから・・・」

「ね？」

・・・

・・・

・・・

2週間後。

そのAIプログラムは、彩香、という。

実際に、綾香、という少女がリアルにいて、その少女のキャラクターをモデルにキャラ設定をしたAIが彩香さんである。

その彩さんは、現在宙に浮いた状態。

そのPCの使い主である少年が、意識不明なまま病院に入院しているからだ。

そのデータを風華が転送して、自分のコンピュータに入れて使っている。

ハヤトのところで、自律起動し、自己修正プログラムによって自己を更新し続けた彼女は、なかなか便利なツール、いや、とても頭のいい女の子に成長していた。

初期設定をした彼女自身が、AIってこんなに便利なものだったのか、と思うほどだった。

風華から見ればちょっと機械音痴（コンピュータ音痴？）だったハ

ヤトも、いつの間にか、コンピュータを使いこなせるほどになっていたらしい。

自己修正プログラムだけでは、ここまでは変化しない。

そんな彩さんとの日々が始まって、ある程度経ったころ。

学校のその少女とも、そう、例のハヤトがやっていたキャラ、イフエリナに雰囲気似た少女とも、割と仲良くなっていた。

そうそう、トントン拍子に事が流れているわけでもない。

彼女の中での、なぜ？という疑問は、まだ解け切っていない。

それでも、彼女は、自分の解する世界の中で、自らの日々を送らねばならなかったのだ。

疑問もあるが、世界への順応も存在する。

そう、ただ彩香さんとの日々も、学校でのそのイフェリナに似た少女と始まった日々も、

彼女には、悪くないものだった。

というより、どこかでシコリを残しつつも、いい感じじゃないか、
と思い始めるには

、
十分な”世界”がそこにはあつたのだ。

Realize Network - 本編 - No. 3 海。

そこは海。 ありきたりと言ったら海に失礼だが、何処にでもあるようで、何処にでもない海。

その日は天気がいいにも関わらず、空は晴れているのに、何処かそれは何処か暗い印象があり、涼やかな風はそれを尚更印象付けている。

そこに少女が一人、海風に吹かれて笑顔で海の向こうを見渡している。

風華はそんな姿を眺めながら、その姿に過ぎ去ったもう遠い過去でもあるかのような世界を重ねていた。

自分から誘った。

何時ものように、そう何時もの、当たり前のことであるかのようなことを持ち出す感じで、

別にそれに違和感など感じなかった。

楽しめればいい。ぐらいに考えていた。

だから、目の前の少女と彼女の今の周囲の世界は、その対比の中で、何か虚しくも酷な現実を感じさせるようで。

その目の前に佇んだ世界を、その美しくも物悲しくもある世界を、ただ直視することしかできなかった。

「イフェリナ」

そう呼ばれた少女は、「あ^^」とこちらを振り返ると、「風華ちゃん〜。」

と風に吹かれる衣服を纏いながら、笑顔でこちらを見ている。

「・・・・・・・・」

風が突風のように吹いて、何かが言われているがそれが分からない。

「え？・・・」

そこで、夢は途切れた。・・

目覚めると、開いた目の先には明るい朝の部屋。

ふかふかのベッドの上で彼女の脳は微睡の中から覚醒しようとしている。

「なんて夢だ・・・」

横に頭を動かすと、半透明の時計が空間に表示されている。

「おはようござい。 おはよう^^風華ちゃん。」

彩香さんが朝の挨拶。

「ギクツ。 洒落にならないよ。 それ・・・」

「はい？」 「なになに？」 そういつてニツコリ微笑む。

ハヤトのところにいて口調が丁寧語だった彼女に、

もっとフランクな話し方でいいよ。 といったのは風華だった。

だが見ていた夢と重なって、少し嫌な気分になった。

「はあ・・・トースト焼いといってくれる？」

彩香さんにそう言うと、「はいな」と返事が返ってくる。（キラがまだ定まっていない）

別にコンピュータプログラムがトーストを焼くわけじゃない。 当たり前だ。

「あ。 あと、コーヒー。」

この辺は古典的な彼女。

割とお金持ちな風華の家、彼女は一人暮らしだったが、AI用のボディを買うのに、それほど大金が必要というわけでもない。

昔はそうだったが、今では量産され、手頃な値段で手に入るようになっていた。

モニタ上の彩香さんのグラフィックに合わせ、骨格部分とかボディ、顔とかオーダーメイドで作ってある。

だがオーダーメイド自体は今それほど高くない。基本スペック（搭載されるコンピュータや骨格となる部分の基本構造）はどれも一緒だったから。

要は、搭載するコンピュータや基本構造、動作は一緒に、「形」の部分だけオーダーメイドしている。

そういう仕組みが今があるので、それを利用して彩香さんのボディを注文したのだ。

「ふわあゝ」大きな口をあける風華。

「今日は。」するとすかさず彼女の前に投影モニタが大小2、3開き、今日のスケジュールが表示されている。

「うゝん、あんま空かないなあゝ」

「なにか、スキップできる授業ないかな？」

「ね、彩香さん？」

「あ。．．ちよつと待ってく．．待ってね^^」

何故か目玉焼きをフライパンの上でジャンプさせて返している彼女。
．．あれ。

見ると、キッチンの上に、朝食の材料が一通りボールに入っておかれていた。

「彩香さん。そんなにいらないんだけど。」そういつて苦笑する。

「えっと．．はい。データ反映させておきました。」「た、してお．．あ、うん ありがとう」カップのコーヒーを啜りながら、

スケジュールに反映された、飛ばしても単位に影響しない授業のデータを表示する。

「うー．．」カップを口に付けたまま、それを見ている。

「彩香さん。。」

「はい？」

「それ、食べないとダメかな？」

学校。・・今朝の夢。その少女とは、今では友達だった。

「おっはー 元気いー？ 優花。」

「あ。^^ おはようー 風華ちゃんー」

その少女は、まるでハヤトに摩り替わるように、風華の親しく付き合う友人となっていた。

イフェリナ。・・別にハヤトがイフェリナ、というわけではない。

それは彼がプレイしていた一つのキャラクターに過ぎない。

ハヤトがイフェリナのような表情をしたのだって、そのときはまだゲームのキャラから抜けきっていなかっただけなのかもしれない。

だから、重ねるのはどうかとも思うのだが、どうしてか、優花と話していると、イフェリナと、・・いや、シナリオの中の彼と話しているような気がしてしまうのは気のせいなのだろうか。。

まだ、引きずっているのかな・・？

少女は、放課後、風華を海へと誘う。・・

ただの偶然にしては、出来すぎている気がしたが、それも、・・少しは驚いたが・・気にしないことにして、彼女は友達 of 彼女と日常会話をしながら、

海へと向かった。

・・海へついてみて、彼女は少しギクリとした。

そこは、彼、ハヤトと、以前何度か訪れたことのある場所だったからだ。

「・・・・」 何かまた信じられないことが起こっているような気がして、その海の先を眺めていた少女。

「風華ちゃん^^」 そういつて呼ばれた方を振り返ると、

少女は、風に吹かれ、衣服をそれに揺らしながら、その微笑みの中に、こちらを見ていた。

その時、彼女の携帯端末に、ある一通のメールが届いていたことに、
風華は、まだ気づいていなかった。
・
・

「風華ちゃん^^」

そう言ってほほ笑んだ彼女は、ある一つのことを言った。

自宅のマンションに着くと、彼女はぐったりとソファーにもたれかかった。

夕暮れを過ぎた薄暗闇の世界。照明もつけないままの室内は薄暗く、開け放った窓からレースのカーテンを揺らす風が吹き込んでいる。

室内には誰もいない。風華以外。

彩香さんは買い物にでも出かけたのか、吹き込む風だけが、室内に動的な空気をもたらしていた。

「ふう」 溜息をつく。

その場所での出来事を思い出す。

海風に爽やかに吹かれる少女は、ニッコリほほ笑むと、彼女にある

ことを告げた。

「風華ちゃん^^」

「？」 そう呼ばれた少女は、その子の方に視線を向けた。

「あのね。話して置きたいことがあるんだよ」

そういうと、少女は両手を後ろに組むと、やや前向き姿勢になり、

「.....」

その先は思い出したくない。

何故、そんなことを言うんだよ・・

じゃあ、・・

「ふう。」

溜息をつき、起き上がると、ポケットに突っ込んであった携帯端末

を机の上に置いた。・・

と、そこで、携帯のランプが点滅していることに気づく。

あれ？

そうか・・

携帯のタッチパネルに軽く触れる。・・半透明のポップアップが開く。

それは、以前連絡した、とあるネットやコンピュータに詳しい知人からのメールだった。

そういえば、調べてほしいって、メールしておいたんだっけか。

・・・・・そのメールを読んで、彼女はとある事実を告げられる。

いや、それが事実だと認めたくない、どこかで思っている。

だが、昼間の一件もある。

彼女、優花が言い放ったその言葉は。・・

「私が、誰だか分かるかな？」

そう微笑んでいる彼女。

「……」 そんなセリフを聞かされれば、また嫌な展開を思い当ってしまう。

「風華ちゃん^^」

「えっとな。」

「・・・ちよつと待った。」
そう言つて手で制する。

「とハテナ顔できよんとする彼女。」

「なんだか、すごい嫌なこと、言われそうな気がするわ・・・」

「あはは・・・。嫌、なの、かな・・・？」
これから告げられるだ
ろう事実を知っている彼女は、そう言う。

「だつてさ．．？　あなたは．．」

「私は優花だよ？」　そう言
って笑う。

「……………」

「それだけ……？」

「ううん。」
その表情には常時、にこやかな笑みが浮かんでいる。

まるで、何かとても楽しいことを、しているかのようにな。いや、そうなのだろう、実際。

だから、風華は困っている。その告げられようとしている真実と、それを楽しんでいる彼女。

そんな現実を認めたくない自分。

感では、そうなのだろうと、感じ取ってしまっているから。

だから、その言葉を告げられたとき、彼女の中で、何かが、．．いや、確実に彼女の世界が崩落していくのを、感じずにはいられなかった。

まるで、その音が、聞こえそうなほどに。

その時、確実に彼女の中で、何かが終わり、そして、これは困ることなのだが、（少なくともその頃の彼女にとっては。）新しい何かが、
始まって行った。

そう、それが、彼女達の関係の、新しい世界の、始まりだった。

．
．
．
．

．
．
．
．

ダメだ・・・

『あのね。風華ちゃん。』

『・・・・・・』

そこから、彼女なりの簡単な説明が話された。

それと、メールの一件。

「だって、病院には何も、・・・細工した節はなかったんだよ？

なのに・・・

『病院で寝ているのは、確かに私だよ？』

『・・・・・・』

そのメールには、水面下で、何か工作されたいとことが書かれていた。

聞こえの悪い言い方をすれば、裏で何かが動いたらしい、とのこと。

それと今回の一件。

『でも、これが、今の私なんだよ^^』

『・・・・・・』

相変わらず、海の爽やかな風が吹いている。

こんな状況でも、海風は涼やかで。

『・・・・・・』 眼を閉じて、・・その言葉を噛みしめている。・・
私はね。ハヤトだよ？^^ ..これが、今の私なんだよ^^

・・・・・・

・・・・・・

・・・・

・・

現実を受け入れるには、時間がかかりそうだった。

その新しくもたらされた世界に慣れるまで、しばらく時間がかかるであろうことが感じられた。

それが、真実であると、どうやって証明する？ 直感ではそれが正しいと告げていて、だが、彼女が言っていることが、嘘だと思っていた自分もいて、・・

今までに直感が外れていたことも、．．いや、実は外れではなく、
前回はずれたと思ったのは、実はあたっていたのだが、

だとすると、いや、まだ当たっていると断定するには、．．

彼女は少々混乱しているようだった。

それは、そこから始まる新しい日々の、ほんの始まりの出来事だった。
。

ある時一通のメールが来る。

「あの場所で待ってるよ^^」

一瞬、何のことかと思った。

だが、送り主が優花、となっている。

”あの場所”・・・そのとき、思い当たるのは、一つしかなかった。

これまでの優花との関係の中で、あの場所、と共通項そして通じるような場所といえば、あそこしかなかった。

しかし何故、その世界にもう一度・・・

自宅に帰ると、彩香さんが出迎えてくれる。

「おかえりなさい。」そういつて微笑む。

「ただいま。」そういつて笑う。

「と、あのさ。優花。・・・つまりハヤトから、連絡来て、例の場所で待ってる、と。」「そう言ってきたんだ。」

「^^」

「どう思う？彩香さん。」

「行ってくるといいですよ。」そう言っにこやかに笑っている。

「でも、今になって、あそこで会おうとする理由って何だろう。．．」

「ねえ。彩香さん。？」

「行ってみればわかります。^^」

「何か言おうとして、止めた。」

直観の鋭い彼女。何か知ってるのかな？と思った。

だが彼女の言う通り、行ってみるしか知る術はなさそうだった。

「と。その前に。。。」「まだ時間はあるか。」腕時計を見る。

「彩香さん、軽く夕食摂りたいんだけど。」笑顔でそう言つと、

「^^今、作りますね。」そう言って、台所の上に乗っている買い物がこに入った材料の方へ向って行った。

夕食を作る間、ソファアの背もたれに体勢低く寄りかかって、天井を見上げて考え事をしていた。

ハヤト・・・何を考えている？

何故今になって、あの場所で会おうと・・・？

考えても考えても、分からなかった。

やがて夕食ができると、割と豪華な料理がテーブルの上に並び、夕食を取る。

そんな中、彼女は彩香さんとの会話に花を咲かせ、久しぶりに何処かしか、元気な様子を見せていた風華だった。

「よしっ、（活力充填っ。）行くよっ。」

心なしか、気合いを入れるように、そう言い放つと、専用シートに座った。

久しぶりのダイブだった。

ハヤトの一件があつて以来、ネットに潜ることが少なくなり、そしてダイブしなくなり、何時しか何週間もの時間が経っていた。

元気が出ているのは、久く潜っていないその世界に行くことににも

起因しそうだった。

本来、そういう世界に浸って過ごすことが多かった彼女。

思えば、ここ数週間、彼女のペースは崩れっぱなしだったように思える。

何故だか彼女は、その場所で会う、その言葉を聞いてから、元氣が出てきてるように感じられた。

モニタの上を軽く手を滑らせる。

「メインシステムオン。」

埃をかぶったようなそのシステムが起動する。

「いつてらっしゃい^^」 彩香さんが見送ってくれる。

「^^ 行ってくるね。」

そう言って、一時の別れを告げると、少女はその世界へと移行していった。

その丘は、草原というか、花畑に近い。

花びらが風に舞い、それがまるでスクリーンセイバーのように、二人の少女の周囲に展開している。

以前訪れたことのあるこの場所。二人で偶然見つけた、黄泉の世界であるかのようなこの場所は、二人にとって、とても特徴的な思い出の場所となった。

少女にメールで言われた時、パツとこの場所が浮かんた。

だからその場所に呼ばれたとき、何かあるな。と彼女は思った。

「ハヤト・・・」

「優花・・・いや、今はイフェリナだよ。」そう言って笑う。

・
・
・

「あのさ。。。聞いておきたいことが。。。あるんだけど。」
少しの沈黙の後、彼女はそう訊いた。

何故か聞くのが躊躇われて、引きずったまま、今に至ってしまったこと。

「・・・何かな？^^」 それは、何を訊かれるのか、知っているような顔だった。

・ ・ ・

「イフェリナ。 ・ ・ ・なぜそうなった？」

「・・・話すと長くなるよ。 ・ ・ ・でも、風華ちゃんには、
・ ・ ・イーリアちゃんには、話して置きたいと思うよ。」

その時、彼女が指先で軽く中空にサインを描くと、空間に透明なモ
ニタが出現し、二、三指を走らせると、

それまで、花びら舞う草原のような風景が、空を舞う花卉が過ぎ去
ると共に、世界が暗転し、そして、幾重もの世界、ビジョンとでも
言うべきいくつものグラフィックがフラッシュバックし、遠い暗闇
の先から、何か景色が ・ ・ いや、世界の塊とでも言うべきものが急
速に迫ってきて、周囲にももの凄い勢いで展開した。

そこは、ヨーロッパの街並み、とでも言うべき、それに酷似した場
所だった。

というか、それはヨーロッパ、の何処かの様だった。

「!!!?・・・」そこは仮想現実世界と言うにはあまりにリアル過ぎ
て、突然現実世界のヨーロッパの何処かに移動したかのような感覚
に襲われた。

辺りを見回している彼女。

「ここは？」そうハヤト・・・いや、イフェリナ、今はどちらでもいい、に訊く。

「ごめんね。驚かせて」

「ここは・・・まだ、中なんだよ、ね？・・・」

「うん。まだ、ね。」

「・・・」　「まだ・・・　まだ・・・　彼女はその意味を考えた。

だが、明確な答えは出ずに・・・

「・・・何が、言いたい・・・？」

それに、少女は、ふと眼を閉じ、答えた。

「まだ、中・・・」

その言葉だけで、彼女の言わんとしている意味が、感じ取れた。

・・・感覚フィードバックか。

「・・・何となく。・・・でもそれより、イフェリナ　・・・いや、ハヤト。君は、どうしてその場所に立つことになったの？」

「私には、その方が気になる。」

「それは、私が、今の私を、選んだからだよ。」

「何が。。。起こったの？」

「私は、．．私であることを選んだ。．．それだけだよ。」

「．．．．．」

・経緯は話せないということか。

「仕方ないなあ。。。」

「綾香さん、ちょっと来てもらえる？」と、その名を呼んだ。

・彩香さん．．？

すると、また景色が一変し、いや、そこはまだヨーロッパの街並みだが、．．ここは、．．あのシナリオの中か。

同じような景色だが、意味合いが変わっている。雰囲気が一変している。

何処か懐かしいその場所は、彼女に何となく、安心感のようなものを与えた。

「．．．．．^^」

「．．．!」

気づき、驚いてそちらの方を向くと、そこに、一人の女性とも、少女とも、どちらとも言えない雰囲気の子が立っていた。

「こんにちわ。」そうニコリ微笑んだ。

「誰．．」と、そこで、さっきハヤトが言ったセリフを思い出す。
．．「彩．．、いや．．綾香．．さん？」

柔かな一陣の風が、吹き抜けた。何かの演出であるかのように。

．誰かが吹かせた風かな。

芹沢 綾香．． AIナビゲーションプログラム「彩香」のモデルにして、そのプログラム自体を、自分で作った女性。

要は、自分をモデルに人格プログラムを作ったのだ。

風華の家に居る「彩香」は、風華が設定を色々カスタマイズして、ハヤトに渡したプログラムだった。

「私が優花ちゃんを誘ったんだよ。」

いきなり答えが出てきた。

「優花ちゃ．．あなたが黒幕なの？」

「黒幕、か．．」　　そういう捉え方、も出来るわね？」「そうそう、私が黒幕っ　　なんてね」

「あゝ．．．」 あっけにとられている風華。

「優花ちゃんには、私に協力して貰ってます。」 そういつてニッコリ。

「．．．．」 風華は釈然としない気分だった。

「何故ハヤトなの？ それと、何故イフェリナにする必要があったの??」

「^^ハヤト君には、以前、なにかと協力してもらってね。それで彼に今も色々と手伝って貰ってるんだよ。．． それとハヤ

ト君がイフェリナちゃんになった訳は、彼がそう望んだから、．． 彼女になったってわけ。」 そう言つて、フフ。と笑う。

「．．．．」 風華は納得できないような顔で黙した。

そして、また景色は移り変わる。

それは昔あったコンピュータのモニタの背景のように、かといってクオリティは高いものとして、移り変わりゆく。

「ごめん。なんか、意図した状況に引き込もうとしてるようにしか見えないわ。」

そこで、ハヤトの表情が少し変化する。何か、指摘されると思っていなかったことを指摘されたような。そんな印象を受けた。

「ハヤト、あなたが、何を考えているのか、何となくわかった気がした。

「ただ、私は、その目論見には参加しないよ。」 「私が望んでいることは、これとは違う。」 そう言って、微かに笑った。

何か苦いことを、言った後のように。

「ごめんね。風華ちゃん。」

。「風華ちゃんの言ってることは事実だよ。」 そういつて笑顔に戻す。

「ただ、と少女は続ける。」「風香ちゃんが、したいようにしないことは、残念なことだよ。だから、」

「ハヤト、いや。。優花。。がんばってね^^」 そういつて、彼女は笑顔だった。

それは一つの別れを、告げる言葉のように。。

そうして、一つの幕が降りる。

それは、それから続く、彼女の新しい物語の、序曲なのかも知れなかった。。

桜咲き、そよ風に花びら舞うその場所で、ハヤトは、その先の暗い空を見つめている。

「風華ちゃん・・・」

ああは言ったものの、ハヤトには、風華との関わりがこれで終わりになってしまうのは、残念に思えてならなかった。

「イフェリナちゃん・・・、そろそろ。」

綾香にそう呼ばれ、「うん・・・」と返事をするハヤト。

何か肝心なことを忘れている気がする。

その日々に残した何か。

それと取り戻したいと思うが、どうすればいいかも分からない。

だから、今がある・・・

「彩香さん、トースト焼いといってくれる？」

いつも通りに思える日々に、足りなくなった何か。

その日々にハヤトがいなくなったのはわかってる。

でもそういう単純なことじゃなく、彼がいなくなったただけじゃなくて、足りなくなった何か。

それは、ハヤトがいるから、いないから、じゃなく、過去にはあつて今にはない何かだ。

その原因を彼に見出すのは、違つとわかっている。

だが、今はこれでいい、と何処かで思つてしまつている自分がいる。

本当は底の方で、変わつてほしい、と思つている。

だが変えられない何か、をその世界に見出しているというのか。

いつも通り、過去の通り、彼女、優花は学校に現れ、同じ教室で過ごしている。

だが、話すことはなくなった、どこか距離の開いた二人。

窓の外の空と街並みを眺め、窓枠のカーテンを揺らす風に心地よさを感じる。

こうしていると、足りない何か、などないかのように思える。

そつ、思えるのに、一人になると、どうも、昔と今の対比が意識されてならない。

清算したつもりだったんだが。

それを取り戻したいと思いながらも、どうすればいいか分からずに、やきもきする日々。

それこそが、清算すべき現実かもしれないかった。

さよなら、みたいな別れ方をしたあの日、それが引っ掛かって、今さら彼女に近づくのは、と気が咎められる。

なんてベタな状況に捕らわれているんだろう。

自分がこんな状況になるなんて、思っていなかった。

早い話、ハヤトと昔みたいに、・・・でも今の優花を受け入れなかったら、関係が修復できないことも、

だから、彼女は、ハヤトの昔の姿に拘っているのか。

いや、それが正解でないことは、もう分かっている。

捨てられない自分がある。

もう、変わってしまった、だなんて思うことが間違えだということも、もう気づいていた。

これは私の選んだことだ。

人はそう言う。

だが、それは、本当に自分の選んだことだって、言えるんだろうか、と私は思う。

ここ数年、このネットワーク、っていう世界に出会ってから、よくそう思うようになった。

その世界では、多くの人たちが、ゲームの中で、または体験シナリオの中で、別の役柄になり、

別の人間になっている。演じる、なんてものじゃない、その世界の、その人物そのもの、といってもいいぐらい、その役柄にどっぷり浸かっている。

今回のハヤトのようなケースを見ると、余計にそう思える。

「彼」は彼女になった。

ゲームとか、シナリオの中だけではない。

それが現実にもまで及んで、彼女になってしまった。

いや、それを「しまった」と言うべきかどうか、

それはむしろ、彼、彼女、にとっては好ましいことなのかも知れなかった。

だから私は、友達として、彼が彼女になったことを、喜んであげるべきかも知れなかった。

捨てきれない何かと、こうした方がいいと思える現実。

その間で、私は、迷っていた。

だから、私の未来は、・・・もう分かっていたことだったが、

彼女になった彼、を受け入れること、だった。・・・

夕暮れ近い海を眺めている。遠くの空を・・・

涼風が心地よく、少し涼しすぎるほどの風が尚更ちようどよかった。

ここは「彼」と彼女がよく会った場所だ。

今、彼は彼女になり、今ここに会うことはなかった。

まるで一人の人を亡くしたかのような錯覚に陥る場所。

彼は生きているのに、もうなくなった過去を想うように、
遠くの海の空を眺めていた。

そんな中、目を閉じて、風の中うとうと眠りに落ちかけると、

「風華ちゃん。」

と遠くから声が聴こえてくる。

「ん？」

でも、声が違う。

それは優花のものではない。

そう冷静に分析している頭を眠りから引き起こし、

声の響いてきただろう方向を見上げた。

「やっぱりここにいたー」

「何処かで聴いたセリフだな。．．」

頭の片隅でそう思いながら、ああ、そうか、昔私が．．

と過去の自分に思い当たる。

昔、というほど昔ではないその日々が、もう遠く過ぎ去った過去の

ように思える。

「やあ、蓮ちゃん。」そう言って笑う風華。

「^^　なんか、哀愁漂ってたよ？」

「はは。・・蓮ちゃんには、もう場所覚えられちゃったね。」

「うん。いつつここだもーん。思い出の場所？」

彼女はハヤトと私が、ここで会う機会が多かったのを知らない。

「うん。ちょっとね。」

「キレイだね。」先ほど彼女がそうしてたみたいに、遠い空を眺めてそう言う。

「うん。この場所、・・好き、だったんだ。」

「?　・・だったって、今は好きじゃないの？」

「好き、・・な、気がする。・・ようなそつでないような・・・。」

「あは。・・複雑なんだー」

「そう。・・だと思つ。」「うん。そうなんだ、な。。。」

「なんか、風華ちゃん、男の子みたい。」

「・・・そつか。そうかも、ね。」

そう、そう言われてみれば、最近ナーバスになってることが多い。

それだけが理由か分からないが、随分、キャラが変わったと、自分でも思う。

『また、海かー』

あの頃の自分は、何処へ行ってしまったのか。

まるで別人だよな。。自分でもそう思う。。

「蓮ちゃんは、ここに、何しに？」

浸っていた顔を上げ、少女にそう訊く。

「あのねー。風華ちゃんを、連れに来たの。」そういつてにっこり笑う。

「?・・・私を?」 「どこへ?」

「うーんとねー。ちょっと付いてきてくれるー?」

「うん、いいけど。」

連れて行かれた場所は、とある洒落た喫茶店だった。

その一角に、少女たちの集まるテーブルがあった。

彼女の友達だろうか？

他にこれと思わしき場所もないので、彼女はそう思った。

「あ。蓮ちゃん」

「^^」笑顔になると、彼女達に近づいていく。

「あ、風華ちゃん。彼女達はね、私の友達というかー、ちょっとした仲間というかー、」

「ちょっとした仲間・・・？」

「あー、そうなんだ。」深くは聞かないでおこう。

「彼女たちがね、風華ちゃんを、連れてきて欲しい、って言っから、ついてきてもらったんだよー」

「こんにちわ」そのうちの少女の一人があいさつする。

それに合わせて他の子達もあいさつする。

「えっと、要件って、なんですか？」

「えつとねー、風華さん、ってネットとか詳しいんですよねー?」

「え。・・詳しいというか、歴が長いというか、長い分、それなりに、ではあるけれど。」

「うーんとねー、私たち、みんなネットとかやったことなくてー」

いまだき珍しいな。。

「うん。」

「それで、風華さんに、ちょっと教えてほしいというか、どんなのがいいかとか、導いてほしいなあゝって」

・・・・・

それを聞いた時、ハヤトの一件が頭をよぎった。

「・・・・・・」

「? どうかしました?」

そこで黙した風華を見て、一人が聞いた。

「ううん。・・教えるといっても、ネットとか全く知らない
というか、どんなのがやりたい、とか、ないんですか・・?」

「今、どんなのが人気なんですかー?」

「うーん・・・ネットゲも相変わらず人気あるけど、今一番新しくて人気なのは、一つのストーリーというかシナリオを、その世界の住人になって体験するシナリオ体験ゲームかなあ・・・（私がそれを言うか・・・）」

・ ハヤトがああなったのは、私も原因の一端を担っているからなあ・・・

「へー、そんなのがあるんだー？」

「うん。・・・でも、それには一つの弊害もあって、シナリオにのめり込み過ぎて、現実生活に支障をきたすケースも、出てきてる。・・・」

「・・・」

「あはは・・・^^;」風華が苦笑いしていると、

「でも、人気あるんですよ？　出てきてるってことは、まだ多くはない??？」

「え。・・・うん。そうだけど、少なからずともリスクがあることは、わかった上でやらないとね・・・」

「へー。・・・でも、面白そう^^」

よく私の口からこんなセリフが流れ出るものだ。・・・

私は・・・

「そのシナリオを体験するゲームって、お勧めのつてありますー？」

「……どんなものもお勧めできる気分ではないのだけれど・

「うーん、取りあえず、今人気のシナリオ体験ゲーム集めたサイトあるから、そこ、教えるね。」

「こついう逃げ方するのもなんだけど、今お勧めのゲームとか、紹介できる気分じゃない。」

「そうですかあ。でも、できれば、風華さんのお勧めが、よかったんだけどな。」

「やっぱりそう来たか。^^；

「……えーと、じゃあ、そのサイトみて、何かやりたいのとかあったら、それについて教えたり、やり方とか教えるので、それで、（勘弁して……）いいですか？」

「はあーい、わかりました^^」

「ふう。」

「ちなみに、風華さんは、今どのゲームをプレイされてるんですか？」

「あ……。お勧めじゃないけど、そのサイトには載ってないんだけど、今テスト期間中のゲームがあるのでそれやってます。」

「へへ、そうなんだ」

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・

不意にメロディーが流れる。

空間にウィンドウがポップアップする。

「ん？」

「加奈さんからです^^」

「かなさん？。。あぁ、」

「この間の。」

「はろ？」

キャラかぶってるから。

「こんにちわ」

「風華さん、この間教えてもらったゲーム、今みんなで作ってるんだけど、これから、またみなでINするところんだけど、風華さんも、こなーい？」

「・・・んー、（またハヤトみたいなことにならない、かな・・・？）別に、構わないけど、・・・途中参加でもOK？」

「全然平気だよー、ちょっと意味分らないところもあるかも、だけど、それまでのあらすじみたいものも、プレイできるから」

「そっか。そういえば、そうだったよね。・・・」

「もうちょっと、時間かかるけど、ちょっとだけ、待ってもらってもいいかな？」

「わかりましたー、じゃあ、みんなにそう伝えておくので、待ってまーす。」

そう言っつて、通信は途絶えた。・・・

「・・・いいの、かな・・・？」

別に、悪事を働こうとしてる訳じゃないんだし、いい、よね。

「ちょっと、用事を済ませないと。」

「彩花さん、」

「はい^^」

「明日の・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

霧が立ち込めていた。

霧の中の森、そこに降り立った彼女は、どこかファンタジー風の格好をした少女の姿だった。・・・

カチ、カチ、カチ、

時計の音が聞こえる。・・目覚めると、そこはいつもの部屋だった。体を起こすと、違和感を感じる。

ああ、・・そうか。今は、女の子の体なんだった。

ベッドから起き上がった自分は、フリフリの女の子の衣装を着ていた。

このまま寝ちゃったんだ。・・

このボディは機械で出来ている。

横になっている間は、寝がえりをうったりしないので、さして問題にもならないのだが。

優花、になってから、もうだいぶ久しく時間が立つ。

だが昔のことを思い出して、ふと気付くと、ああ、自分は、今女の子だったんだ。

と、思ったりすることがある。

彩花さんもういなくなった静香な部屋で、一人目覚めて、出かける支度を始める。

AI用ボディなので、特に朝食を取ることもない。

特にさみしいとは思わないが、

ただ静かだな、と感じる。

彩花さん、風華ちゃんのこと行っちゃったしな。

AI、・・・買おうかな。。？

綾香さんの仕事の手伝いをして、ある程度、お小遣いには余裕があった。

それに、AIがあると、何かと便利な側面もあるのだ。

帰ってきたら、ネットで探してみようかな。。

そんなことを考えながら着替えが済むと、玄関へと向かった。

・・・

・・・

・・・

今日の仕事場、ちょっとした出張に向かう車の途上で、何処か見覚えのある海辺を通る。

「あ、・・・」薄れかけた記憶が働いて、その場所を思い出そうとする。

どうもイフェリナの記憶の入ったこのボディになってからは、以前の自分の記憶が薄れていく傾向にある。

なのでその場所を見たときも、その場所だって、思い出すのに時間がかかり、

「ちょっと、車を止めてもらえるかな・・・？」

そう言うのに時間がかかり、その場所を通り過ぎてからそのセリフを言っていた。

その場所に立つ。

海。・・・そこは、海、もちろんそうだが、ありきたりの景色だが、そこから何かを思い出そうとする。

思い出そうとするが、記憶がどこかへ行ってしまったみたい、思い出せない。

あれ、・・何で私、ここに立とうと思ったんだっけ・・・

後ろを振り返る。そこには、先ほど出てきた黒のリムジンのような車がさも当然のように停まっている。

「・・・・・・・・」

その周囲の景色も、「ん？お前、何してるの？」とでも言わんばかりに、（実際にそんなこと言うわけがないが）平然と広がっていた。

・私、ここで、何しようとしてたんだろう。

そんな疑問を感じながらも、仕事の時間を思い出し、その車へと歩いていく。

「ごめんね。打ち合わせの場所に、向かってくれる？」

そう言うと、車は走り出す。

何か心を残すように、窓の外に目を向けると、その景色が見えなくなる間際、そこに、誰かが座っているような、気がした。・・

「イフェリナちゃん」

「はい。」

綾香さんは、自分のことをそう呼ぶ。

現実世界での名前は、優花、ということになっているのに、

確かに、このボディに設定された記憶とか精神みたいなものは、イフェリナのものだった。

だからイフェリナ、と呼ぶのも分かるのだが、

一応中身は、イフェリナ、ではないのだが。

「学校、これからも行きつつづけるの？」

「え。」

そう言われて、一瞬止まってしまう。

「それは、どついう、ことですか？」

「えっとね。仕事、本格的に手伝ってみる気、ない？」

薄々そのうちそう言われるんじゃないかということは感じていた。

だから、ついに言われたか、という部分と、ホントに自分でいいのかな、と思うところがあり、

返す言葉に詰まった。

「イフェリナちゃんが仕事手伝ってくれば、すごく助かるし、もちろん、十分生活していけるだけの、お給料はだすよ?」

「……」

「どうかな?」

その時、優花の中には、学校のことが浮かんでいた。

何故だが理由は分からなかったが、あそこをやめちゃっていいのかな? って思いが、頭にあった。

でも、特にやめて差し支えあるような理由があるようにも思えなかった。

「なんでだろう? あそこに、……何か、あったけ……?」

「イフェリナちゃん。。?」

「あ。はい。」

「何か、問題でも。あるのかな?」

「うーん、特に、ないですが。。」

「うーん、何か、忘れてる、気が……」

「まあ、いますぐに、決めてもらわなくてもいいよ?」

「あ。はい。少しだけ、考えさせてもらって、いいですか?」

「うん。待ってるね^^」

そういつて、打ち合わせの後の時間は、終了した。

・学校、行ってみよう、かな。

・

・

・

・

久しぶりに、学校にやってきた。

比較的校則の緩い学校で、綾香さんの仕事を手伝っている、と事情を話したら、仕事の都合で学校を休むことを、了承してくれた。

特に何もない。 ・ ・ 箸の学校。

友達も何人かいたが、別に、学校をやめても、問題ないように思えた。

学校でしか会えない訳じゃないし。

でも、何かが、引つかかっている。何か肝心なことを、忘れているような。

秋にしては暖かい日和のなか、ザツと何か足音が聞こえた。

「・・・？」

振り返ると、振り返った優花に向けて、あ。という表情を浮かべて、一人の少女が立っていた。

「優花・・・」

「・・・？」一瞬、誰なのか、見覚えがあるような気がしたが、わからなかった。

その反応を見て、少女が何かに気づいたような表情を見せる。

「・・・もしかして、私のこと、覚えて、ない？」

「・・・あ、・・・風華・・・さん？」

「・・・」「・・・覚えて、ないんだ・・・？」

「あ。あの。・・・ごめんなさい。」

「うーん・・・」と考え込む少女。

「あ。あの〜。」

「ちょっと、来て。」

そう言いつと、風華は、優花の手をつかみ、どこかへ向かって、歩き始めた。

「私なりに、ちょっと調べてみる。」

風華はそう言うと、優花をなにやら装置に繋いで、コンピュータのモニタを幾つか開かせた。

「風華さん、なに、するの、かな・・・？」

優花が心配になって聞いた。

「優花・・・あなた、記憶を失っているでしょ？」

「え、ええと・・・そう、なの・・・？」

「うん。だって、私のこと、忘れてるでしょ？」

「・・・??？」

「・・・」変わり果てた、と言っでは言い過ぎか、、その優花を見て、風華は考え深げに沈黙する。。

「彩花さん、」 「はい^^」

「優花の内部データ、全部モニタに表示してくれる?・・・できれば、
だけど。」

「はい^^ やってみますね。」

彩花が専用のイスに腰かけて、軽く目をつむると、コンピュータの複数のモニタに何やら様々なデータが目まぐるしく表示され始める。それを険しげな眼差しで眺めている風華。

彩花が薄く眼を開く。

「やっぱり、プロテクトが掛かってるみたいです。」

「・・・解ける？」風華は慎重に聞いた。

「できないこともないでしょうけど、・・・大丈夫ですか・・・？下手に解くと、データが送信される可能性がありますよ??」

「・・・やっぱり、そうなる、か・・・」

「たぶん、だけど、・・・何かしらの干渉が仕掛けられてると、思うんだよね。？」

「・・・記憶が抑制されてる可能性があります、ね。」

「うん。そうでなければ、優花が・・・ハヤトであった頃の記憶、なぜ、忘れてるの、かな。」

「・・・うーん・・・男であった頃の記憶、優花さんにとって、もういない、か、何かいやな思い出として、認識されているの、か。」

「うん。その可能性もある。」

「あの一・・・」

「ん？」

話に夢中になっていて、優花の存在をすっかり忘れていた。・・・いや、優花の話をしたいが、そこにいるのを忘れていた。

「何の話かわかりませんが、・・・私、何も、忘れて、ませんよ・・・」

「いや、忘れてるんだよ。」これは重傷かも・・・？「私、・・・あなたの友達だったんだよ。」

「・・・」

「やっぱり、忘れてるんだね・・・？」

「確かに、何か忘れてる、という感じはありましたが・・・」

優花は思う。・・・ただの、クラスメートじゃ・・・？

風華は思う。

ハヤトは寝ている。だとすれば、ハヤトがこうして優花として過ごしているのは、なんらかの経路で優花のボディにアクセスしていると考えることができる。

だとすると、プロテクトを解こうとしたら、その情報がその経路を通して何処かへ送信される可能性がある。

彩花さんも、そのことを言っていた。

風華は表示されたデータを一通り眺める。

やはり、肝心な部分はプロテクトが掛けられている。

優花の記憶が操作されているような節は、今のデータからではうかがえなかった。

男であつたころの記憶を自ら封印した・・・？

優花にとって、そんなに辛い記憶だったのだろうか・・・？

特に辛い現実を抱えている風は見てとれなかったが・・・

とはいえ、風華はそんなに深く、ハヤトのことを知っていたわけではない。

そもそも、ハヤトに女の子すべく、ゲームに誘ったのは風華なのだ。

それ以前から、ハヤトにそういった願望があつたとすれば・・・

フリフリの衣装を着た、女の子になりはてた優花を見やる。

「そうなの？ハヤト・・・いや、優花・・・」

「優花・・・」

「？」顔に疑問符を浮かべる少女。

「ホントに、．．思い出せない？」

「．．．．」

「私のこと。思い出せない．．？」

「．．．．」

「よく、海で会ったよね。？」

「．．．．」

「思い出せ、ない．．？」

「．．海、です、か．．．．？」

そのとき、優花の中に、何か引つかかるものがあつた。

風華の中には、確証はないが、何か、勘のようなものがあつた。．．

優花は、記憶を抑制されている、という．．単に、思い出したくない記憶、とかそういうことではない。

そついう確信にも似た感覚があつた。

「うん。そつだよ。優花。．．海で、よく、会った。」

「．．．．．海．．．．．。ごめんなさい。思い出せない。
「．．」

「うん。いいよ。」

「なにか、思い出しそうなんですが、思い出せない・・・」

「そつか。^^ 大丈夫、だよ。」

「彩花さん。」

「はい。」

風華の中には考えがあった。

「データ、分析してくれる？」

「わかりました。」

「？」

ひとり、優花がハテナマークを浮かべる。

「優花さん、ここであつたこと、誰にも言わなくてももらえる、かな・？」

風華は、さっき優花に質問したとき、読みだされたデータの記録を、しておいたのだった。

「勝手にボディとか調べたとか、誰にも知られたく、ないんだよ。」

「・・・」優花は少し黙り込むと、

「うん。わかった。誰にも、言わないね？」

そう言って、笑った。

・私のこと、心配してくれたんだもんね・

きつと、彼女は、ホントに私の、友達だったんだ。

だから、「風華さん。・・・ありがとう。」と、そう言った。

「ハ　ハ」風華は、笑顔で返すと、

彼女の装置を外し、そして、彼女を見送った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5674d/>

Realize Network

2010年10月8日13時00分発行